

# あいさつ

豊田市矢作川研究所 会長

鈴木 公平 (豊田市長)

平成 12 年 9 月 11 日から 12 日にかけて発生した東海豪雨は、本市から上流の到るところにおいて山河を崩壊させました。その復旧工事が長野県、岐阜県、愛知県によって突貫工事で進められていますが、完工までに 3 年を要し、その間河川生態に人為的な影響が続きます。

東海豪雨災害は、自然の猛威による生態系攪乱という側面をもっており、しかもその規模が百年に一度と言われています。12 日朝の言語を絶する濁流を目にしたとき、あらゆる生物を押し流してしまうのではないかと感じました。そこで、当研究所ではいち早く追跡調査体制を準備し、自然が受けた打撃と回復の様子を調べることにしました。驚いたことに、豪雨の出水が落ち着いた直後でも、川には様々な生物が残存していました。しかし、間もなく始まった復旧工事による濁水の長期化という事態が重なり、自然生態系の回復にかかる遷移の把握がむづかしくなりました。

幸い、中部地方整備局、県など関係ご当局のご努力により追跡調査等にも明るさが出てまいりました。また、共同研究員ならびに地元でご協力くださる多数の皆様、そして中部電力などのおかげで研究体制が年々充実してきています。平時でも自然生態は様々な要因によって流動しており、その研究は困難を極めますが、地道な調査と試行的実践の蓄積によって少しずつ自然との対話ができるようになって信じています。

さて、豊田市矢作川研究所は発足から 7 年が経過し、越戸ダムから水源頭首工までの所謂都市ブロックについて基礎的な水辺の生態調査を終えました。その結果、脆弱さは否めませんが都市部の自然生態系として貴重な豊かさを保っていることが判明しました。脆弱さの所以は、河川周辺土地利用の都市化圧力による自然的環境の連続性の弱体化等にあると考えられます。

自然生態系の保全が水資源の確保を含め、人にとっても生息環境の健全性のバロメーターであろうと思います。将来を担う子供たちが、日常の暮らしのなかで自然を生態系として知ることができるように、都市的土地利用のなかにも生物生息環境を組み入れていく工夫が必要だと思います。そこで、2005 年の愛知万博をひとつの契機とし、当研究所としても研究成果を生かした実践的提案をしてまいりたいと思います。

関係各位の日頃の絶大なご協力に感謝申し上げ、なお一層のご指導をお願い申し上げます。